

国際オンラインラウンドテーブル  
身と心の位相 要旨集

2020年12月12・13日（土・日）

▼12月12日 フランス時間 09:00-12:30、日本時間 17:00-20:30

第一セッション 身と心：奈良から平安へ

小松靖彦 青山学院大学

日本古代の身と心

フランス時間 09:05-09:35、日本時間 17:05-17:35

ディスカッサント ミシェル・ヴィエイヤール=バロン イナルコ

日本古代における〈身と心〉の思想（「身」と「心」を対にした人間把握）が完成するのは、9世紀末から10世紀前半の『古今和歌集』『後撰和歌集』においてであり、特にこれらの歌集の時代の女性歌人・伊勢が重要となる。伊勢は、宮廷を生きる自己を「身」と捉えつつ、意志の力を超えてゆく不合理な感情である「心」を生きる拠り所とした。この〈身と心〉の思想をさらに深化させたのが、11世紀の紫式部と12世紀の西行であった。この一連の推移を『万葉集』を起点として和歌によって歴史的に跡付けていくのが、今回の試みだが、日本古代における〈身と心〉の思想は、実は「身」と「心」と「われ」という三要素から構成され、その歴史は、この三要素の作る三角形の形の変化として描くこともできる。なお、可能ならば、西洋の〈心身二元論〉、インドの自我の哲学、中国の〈身心〉の思想との比較を試みるとともに、空海の即身成仏の思想についても触れる。

ダニエル・ストリューヴ パリ大学

源氏物語における身を考える ―浮舟巻を中心にして

フランス時間 09:35-10:05、日本時間 17:35-18:05

ディスカッサント 兵藤裕己 学習院大学

欧米言語では適当な訳語が存在せず、「心」に比して注目される度合いが相対的に低かったと思われる「身」に焦点を当てて『源氏物語』におけるその使用を検討する。「心」は『古今集』の仮名序において詠歌の源泉として掲げられて以来文学において中心的な役割を果たしていることを否定する者はいないと思われる。しかしこの二つの言葉は相互補完的關係にあり、かつ分かちがたく結びついている。この発表においては、「身」の使用頻度がいちばん高い「浮舟」巻に焦点を当て、『源氏物語』に使われている「身」のそれぞれの意味、使われているコンテキストの分析等を通じてこの作品における用法の特質を明らかにし、次いで、かつて心理小説と言われていたこの作品の全体としての意図にどのように結びつくかを考えたい。

張龍妹 北京外国語大学 北京日本学研究中心

## 紫式部の「身」と「心」の連作歌をめぐって

フランス時間 10:05-10:35、日本時間 18:05-18:35

ディスカッサント イフォ・スミッツ ライデン大学

中国の儒家思想では、「心」が常に「身」を修めることを通して「心身一如」の境地に保つことが理想とされたが、公私に束縛される「身」と精神的自由を求める「心」との葛藤が問題となり、心身分離状態での「身」と「心」の均衡関係「朝隠」、「吏隠」、「中隠」という発想が見出され、日本の漢詩文にも継承されていると思われる。しかし、それを詠む作品には「朝隠」または「吏隠」などによって「心身一如」の境地に到達したという詠みぶりがほとんどである。白楽天の「自戯三絶句」もそのような作品であると考えられる。それがまた『紫式部集』における「数ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり」「心だにいかなる身にかかなふらむ思ひ知れども思ひ知られず」という連作歌に影響を及ぼしていると論じられることが多い。本発表では、白楽天の「自戯三絶句」に見られるような「心身観」の形成過程を辿りながら、紫式部の上記連作歌と白詩の相違を指摘する。その上で、「身」と「心」を詠む平安和歌と白詩の関係および紫式部連作歌の位相について論じて見たい。

## 第二セッション 身と心を作る関係の構図

ポール・シャロウ ラトガース大学

## 宇治十帖における代償行為

### The problem of Substitution in the Uji Chapters

フランス時間 11:00-11:30、日本時間 19:00-19:30

ディスカッサント 木村朗子 津田塾大学

After the death of the Eighth Prince (Hachinomiya) in Chapter 46 *Shiigamoto*, Kaoru's friendship with him is subsequently mediated and deflected in complex ways by the Prince's three daughters, Ōigimi, Nakanokimi, and finally Ukifune. My paper will address scenes of heightened emotion and tension in Chapters 47-50 (*Agemaki*, *Sawarabi*, *Yadorigi*, *Azumaya*), paying special attention to usage of the terms *mi* / *kokoro*. For example, in *Agemaki*, Ōigimi asks Kaoru not to distinguish between herself and her sister Nakanokimi, claiming that they share one *mi* / *kokoro*. Kaoru, for his part, thinks of Ōigimi alone as a kindred spirit and therefore feels he cannot easily shift his feelings to Nakanokimi, with tragic results. Through the lens of *mi* / *kokoro*, my analysis will bring the sad world of the Uji Chapters into focus.

キース・ヴァインセント ポストン大学

源氏を挟んだ漱石と子規の友情

Soseki and Shiki's Homosocial Genji

フランス時間 11:30-12:00、日本時間 19:30-20:00

ディスカッサント 木村朗子 津田塾大学

Natsume Soseki famously claimed that he didn't like the *Tale of Genji* much. He thought it too "soft," and "rambling" when compared to the "forceful, masculine style of Chinese prose," which he vastly preferred. But did Japan's greatest modern novelist really take nothing from his illustrious predecessor? In this paper, I discuss some remarkable thematic resonances between the Suma Chapter and Soseki's *The Gate*, as well as the Yugiri chapter and *Light and Dark*. These resonances show, I argue, that Soseki's development from a highly "homosocial" writer who focused almost exclusively on men into a perceptive chronicler of emotional conflicts between *men and women* may owe something to his careful reading of Murasaki Shikibu. The *Genji* may thus have served Soseki as an indigenous model for the heterosocial novel he would master later in his career. Noting that Sôseki and Shiki, who declared himself a "lover" [恋人] of Murasaki Shikibu, read the *Genji* together and discussed it as early as 1891, I end by suggesting that Soseki's much delayed and disavowed appreciation of the *Genji* and its "world of men and women" may have come about, paradoxically, through his experience of grief at the death of Shiki and loss of their passionate homosocial friendship.

寺田澄江 イナルコ

泉鏡花における身と心 ——春昼が語る魂の行方

フランス時間 12:00-12:30、日本時間 20:00-20:30

ディスカッサント 助川幸逸郎 岐阜女子大学

身と心の分裂として展開されることが多い人間存在の矛盾・軋轢は、鏡花の作品においては身と心の分裂ではなく身そのものの分裂、心そのものの分裂という過激な形で現れる。また、人間が風景と化し、風景が人間と化するという、鏡花の作品を特徴づける範疇的思考の無化はこの作品においても押し進められている。

『春昼』・『春昼後刻』という作品において注目されるのは、この拡散する世界を二つの平安和歌が支えるという構造で、小野小町と和泉式部の和歌は、「夢」の行方を追う前半と命の行方を追う後半の物語の展開を枠付ける役割を負っている。この言葉の世界に拮抗するものとして導入される、男の指が女の背中に描く□、△、○という意味を捨象した純粹記号による特異な意思疎通のあり方なども含めて身、心、魂の関係を考えてみたい。

この作品を理解するための補助線として、同時期に発表された漱石の『草枕』および鏡花自身の作品、『高野聖』にも触れる。

▼12月13日 フランス時間 09:00-12:30、日本時間 17:00-20:30

第三セッション 身と心：平安から中世へ

エドワード・ケーメンズ イェール大学

‘Darkness of the heart’ (心の闇) in *The Tale of Genji*

源氏物語における心の闇

フランス時間 09:00-09:30、日本時間 17:00-17:30

ディスカッサント 佐藤勢紀子 東北大学

歌語（またはフィギュール）「心の闇」は、紫式部の曾祖父 藤原兼輔の名歌、「人の親の心は…」（『後撰和歌集 1102, 『大和物語』 45 段』など）を起点として世に流れ、『源氏物語』においては度々繰り返して歌または対話に引用されている。このいわゆる「本歌」そのものの場合、また、『源氏物語』のそれぞれの引用の場合の「心」と「闇」の意味合いはどのようなものだろうか。「闇」の性質やニュアンスは、例えば中国の経典に現れる「幽」、「冥」、「暗」とは何らかの関係があると考えらる。

発表では、その関係に触れてから、日本古典文学に於いて、『源氏物語』以前や以後の「心の闇」の意味合いはどのようなものであったかということを検討する。又、王朝の仏教説話文学、勅撰和歌集、私家集、歌物語、歴史物語の和歌や文章などにおけるこのフィギュールの使用例を取り上げながら、「心の闇」という言葉自体とそのトロープ

(trope)に関して、ジョセフ・コンラッドの19世紀末の小説『闇の奥』とジョン・ミルトンの17世紀の詩、『失樂園』を取り上げ、二つの、別々なまたは互いに効果があると思われる intertextual (間テクニク)な「読み」の試みを提案する。

山中悠希 東洋大学

枕草子における「身」と「心」——女房としての「身」と示される「心」

フランス時間 09:30-10:00、日本時間 17:30-18:00

ディスカッサント マティアス・ハイエク パリ大学

『枕草子』の「身」と「心」は、まずは主家賛美の文脈での用例が注目される。『枕草子』の「心」の用例は多く、日記的章段では主従間の「心」の交流の重要性が繰り返されている。例えば宮仕え初期に「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と述べた定子は、「三条の宮におはしますころ」の段では「わが心をば君ぞ知りける」と発言する。一方で「身」については、特に女性に関する用例が清少納言の宮仕え前半期に集中しており注意される。主家の栄華に比して「身」の違和感を語る例、主に「心」が届けられなくて「うき身」となる例など、主家賛美の一環としての「身」の用法が確認できる。宮仕え後半に

は同様の例は見られなくなり、対照的に忠心をもつ臣下としての「身」が示されており、政治状況の変化に加えて、女房としての役割の変化などが想定される。加えてこのような主従の規範として村上天皇の時代が位置付けられていることを「村上の先帝の御時に」の段の解釈を通して指摘する。

**陣野英則** 早稲田大学

「身」の精神性と「心」——古今集から源氏物語へ

フランス時間 10:00-10:30、日本時間 18:00-18:30

ディスカッサント **助川幸逸郎** 岐阜女子大学

日本の文化、日本人の国民性などを論じる際にしばしば指摘されてきた「主客」の未分化、一体化といったとらえ方との関係で、平安時代の「身」と「心」の問題を、『古今集』の和歌、『篁物語』、『源氏物語』を追うことでみてゆく。

『古今集』の和歌では、知的もしくは機知的とされる表現の中に、「身」と「心」という観念に関する思考の一端をくみとることができる。たとえば、「身」が「まどふ」、もしくは「身」が「思ふ」と解される例をとりあげ、「身」の精神性に留意する。

兄と妹の悲恋を語る『篁物語』では、「身」と「心」、そして「魂」という語が集中的に用いられる箇所を起点として、男主人公の「身」と「心」が不可分の状態で妹の「魂」と交流しているあり方を検討する。

最後に、『源氏物語』については、今回、「帚木」巻の後半、光源氏と空蝉との初めての邂逅の場面に絞り、そこに頻出する「身」という言葉のもつひろがりをとらえてみる。

**渡部泰明** 東京大学

中世和歌における身と心

フランス時間 11:00-11:30、日本時間 19:00-19:30

ディスカッサント **陣野英則** 早稲田大学

身と心の分裂・相克を主題とする表現は、中世の和歌においてもしばしば見られる。とくに、西行や他阿など、遁世歌人に顕著である。なぜ彼らはこの表現に惹かれたのか。その要因の一つは、身と心の表現がもつ、対人的な訴求力に求められると考える。身と心は一人称的な自意識の所産と思われがちだが、二人称的な対話の力をも生み出すことを、遁世歌人らの和歌をたどりつつ見直してみたい。

#### **第四セッション 全体討論**

司会 **アンヌ・バヤール=坂井** イナルコ

フランス時間 11:30-12:30、日本時間 19:30-20:30